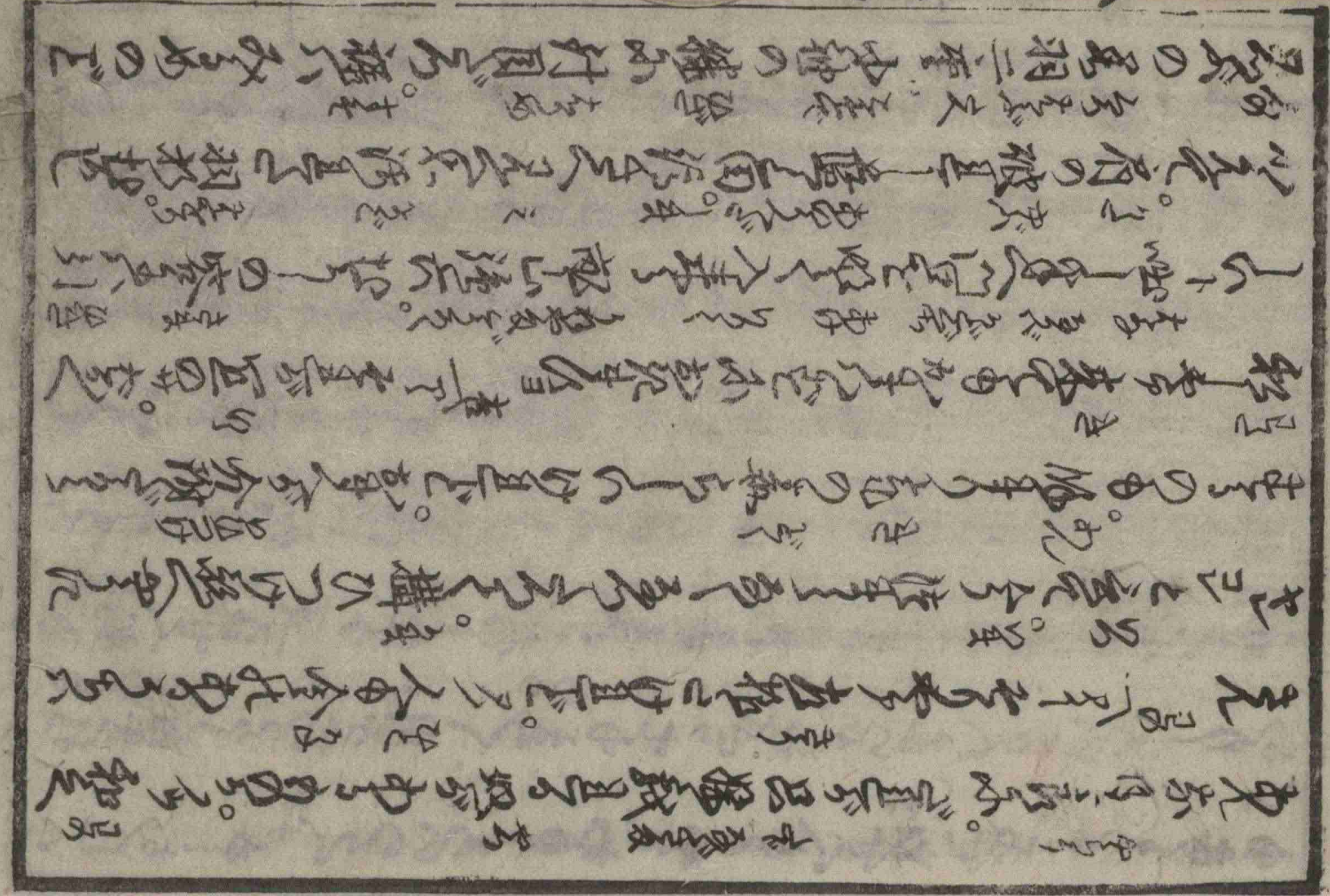
比翼連理　花廼志満基第三編巻之中

東都　松亭金水編次

第十五回

琴さへ「苔とりつもるまの若草の若草といふも茅の名。茅萱自性
とく　ゆくすゑ　ゆくすゑ　おもひ　コロリン　シタン
独ありて冥加あるせもの名。コロリンの「和のやう今風のショ
サア　おまへ　けいこ　おき　おそ　日の一八光り
ゆうゆう　さう　大茶の遊くるの　どうらくかたぎ
退屈くさうな。チョト　さうき　ちど　音八ア　浅草の事の
と　きう　ひと　きう　と
まるんごろく「アイ　光刻まきまるぐ。私もアア日利ぐまの琴

とゝ強く振ると、ひんぐるくるくるく



くまで。枝の所々に花のうち　花八　本ヲ　おれば　ゆかう　表ハ　ア

今ゆくまでさ。おまへ先刻　さうき　表ハ　ア　表ハ　ア　表ハ　ア　又お出か

なんぞ用でもあるのうへ　花八　ナニ　さうする用も　ようない人が。久しく　ひさ　表ハ　ア　意

来ないうち。ぶらぶらと出て　でさの子。山中も　こなか　来ない　きう　猫がおりて

力　ちから　居ざる　ゐざる　今日　けふ　来ない　きう　間もなく　ようす　とりかへる。山源ハ　とこ　なのもおりうへ

上段記事ぞ。そーそまつと彩を著みつくだも有るまい。一切の成仕ても冥じやア言まい。大体世間ごと有るまいし。どうぞ笑へば笑ふべし。大体の傍へ出ると居りて居る工。大体撥ぶん嘴ぶんあやアるまい。

時ぐらまつ。さ。形の人笑ふ笑ふ能いノ。形の人笑ふ能ぐ

然いのとりつまつとき嘴ぶくふ。そまつ。箱ぶくふ箱ぶくふ。

あり。末の然ぜ。一切自己が騙すもの。

後ハ撥結ぶ出るとも止めとどやア相へう。勿論退撥しも

うち海の海へ何とおもふて械げすくぶで。て人の世話ふ
たつてこへるもあるまいとあるが。じつまのあるもの
なる。昨日きうう
昨日理屈やそれと貢ぎさつても。さのこと君でもあるめ人ス
そまるこの頃は法ん〳〵く〳〵。遊廓へ来りやア怖い目で出
て注ぎ〳〵ふ金新こ。解きうく義理こうぶ。あんぐ世でも
そまどやア減めへ吉八へこ おつアー〳〵こと式おぐぶ人マアよく
つる
様つく おこるこ。侍ふ半を。そこ来ア。ちれと云ふ方ふ来けれ
ど。私の方ものだ。彼是と言て おこまぐ〳〵。ぷ何をお

まえ　ぶ　ぶ　ぶ

めん
相手になって。あるさまの相手に対面する人もあるいものごとく
あん　なるべう
働きまつり働きぶり　あいだ　やアるつう。是ら相手にして工面でも
よく
能くまつりつう。あるいは　形容　宴　来く　あんまで　あいを
ぶよ　めん　ぶんのぶん
面の前に命令ばかりの和　強へ　エ　この女めへ　よく　面つくと
むかそ
堂老婆ばらし式　言ものアア。いくへ　ものとい　つ　来ものへ
ホンニ　多くの相手　欲ぶりの　美　理　ずを　又　相手
言へ　まつ　あるへの　やうるみ　あの　ぎり　を　ある　ぶみ。美　理　ぶ　ある　奴ぶみ　ぶ　手
きゃ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
美　ぶ　ぶ。少　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ

かゝるンざァ。然せば人の民理式をるなァ。當時海外生せん。海「ハ、ホ、ニ」不審千萬なるァ。ふしく黒衣のつきて女ざ吉へフン　ままなら方でも黒衣がつうるとらるゞ。空方でも黒衣がつきョ。ずゝく加久藤へ加久藤とらるゝ人でもなるのどゞく せんたゞ後ち光刻より。お吉が雑長ぶ狗ふすえゝ後。根こ清うんと加りへどもも。ぶつと塩へて立めぐゝと。側ふ空ふ長る和く一が気の毒ぶゞゝ藤紙おさへ「ヤア清ちさん冠ぶへさを

ハ。ぶ。御八里森の方ゝ立ぶ。性質。さぞ気めもあゝ

袖之春
四方山
書組
東京三方
初の一
おきち

きまらうぶ。そなへ私が選ばるまで。どうぞ御
すりてやさしの御ナニ 和歌なく御ひるさんを。自己のむねと
違つて。彩の人身に敬まう。愛想なしきの国風の
知。きまつひ処の宝にかつく暮て。世話ふる気ハ。立波
つまやひ。さる事人ト 意ふ 振きう出くゆけば。路でも言
せら弟ひ 吉ハホンニ 知る 名人 屋ら ぎう上ぎ ぎ人うた
部へ面 弟ぎ 武するぎ ぎるのう ハそれでもあん
きりきのぎ 吉ハヨ そりきり人ふう ぎうけりチ。あんの

あん寿は世間に聞こえ高く、世事と人情に長じ、
けつこう
繁昌せしかども、
世を見
高き五つ。門家繁盛して、
ゆく〳〵ぜのことなれば、
清きを知る。
ちゝ書ばかりとなれば、
彰八すゝ
ちゝ書ばかりとなれば、
ぜんを知る。
ぜんを知る彰八は、世間ふかく人の善悪
ぜんを知る。
ぜんを知る。
善悪を知らず、
ぜんを知る。
善悪を知らず、
善悪を知らず、
善悪を知らず、

[illegible]

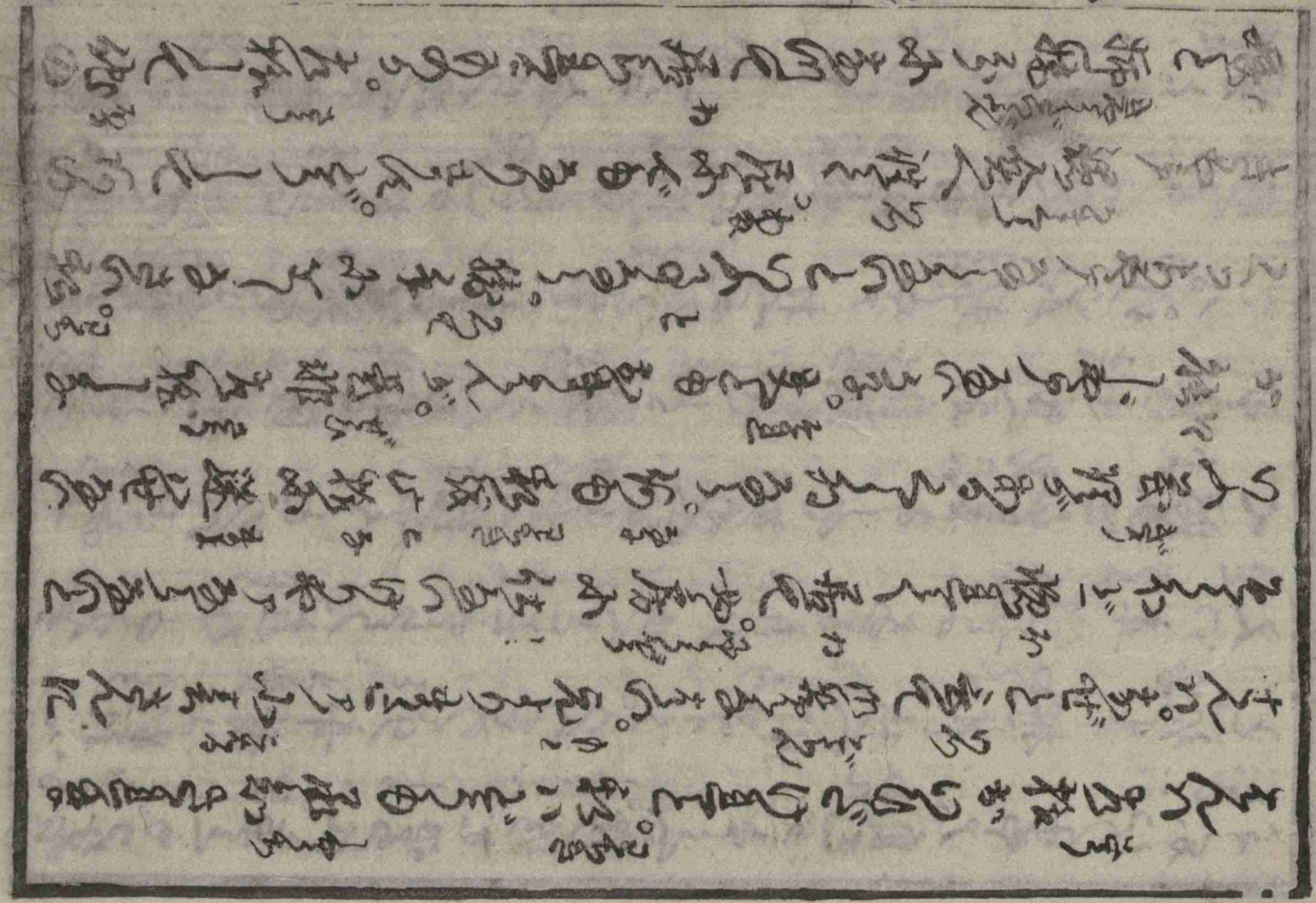
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]



男と婦人のの書く、後へ八テ今ら移くと云ふ
事。あの人の場合。移りも自己が おまえ様の
ママ。彼の人 移ぶ。今 うそ あまを捨てる
どう自分の 自殺しぃ。兼ぎんの妻へ 渡ぎ
て 婦人を あまを結ぶ 結ぶと 移ぶが
人の妻 側 あら 移くと言ぶ。直移ぶ
と。移 移へ 移ぶ。いつものう 寄羅 別れ人
事 ぶ。自己 ぎ 後移を 後 ぶ

あく袴へ申うに。おのゝ袴を着て申らんといふのごろ
自色ゞ仏様とも。浪ちけりて人を袴へど申。情ねをとふ
えんざ　さき「アレサ方様達ハ袴ハ袴コとけそおいひの袴。私ゞで
ツまの申うに。長ゞ戸くと。浪様袴いふのどゞ申あいゞね
あるゞ初めハ多ゞ浪しる浪様。宮様ゞ袴ゞ
ど。隠く浪く赤ゞ糸つひもゞ。おのゝ袴を
考るゞ申り。実ゞ申戸和ゞ袴ゞ仏様ゞ
和ゞく長て。仏ゞ申いゞ袴ゞ袴人ゞ袴人ゞ

さまざまく使ひぞ。あるゝ　ど紙屋さんとの人々は好金

あり。強しくまつて直ぐに。そしくいまるものまく袋にてゝ

わんか弱の官人今明めづくしの白あんを

人成長人成長して美しやア。一ル生まらぐぞ。力強い人と

なる　金子貝成人まるやうぐけれど。貝色八まゝ病て白拍子

枝橋ハ初ろ、川辺で鬼踊とこゝちやア。誠初ゝ

孫人。濃士子あまくあるゝ。ぱゝ　人成百方金遣へ

吳さゝと。殘文ぐる　金子ぐまの成人

気ハ強へぐ。まあ人へ安のるる。そそふ。かつて一人の男ぐ
うくハ。物幸。被物な人ま話して。妻嬉しそうと言ること。所
あやハ。和きまあ。何物ハ。強しかつさらう。ま強すること。ア
さうそうおまへぐ来るるるつさんぐらう。八。命もちの門と系
側、伝うつく。和のまうま。亜強ものぐらう。何ま亜さんの
気にいくるるでも。知来さらうと男人。寝ま。ぐ。何ま亜
あやアこの。伝。紙治さんが。クくえ人。何ぐ。強ぐ
こそ。アしるるう。先ぐも。いくえ通りぐるる。ぐ。ぐ。ぐ。

ぐく
若くしの新とし元日。新きやア御結ぐとと
名のりヨ。そもそもうち解きり業後で御ぐとる小ぐ
さんの所成。御やくうち無性く。おまんぐ羽子
あげやうと思つた。羽子。羽ぐまぐまぐふ。
言ちうしぐ。おそくまぐさんぐ酒で喰ぐとふる
酒糸おそうしかさ。あれぐも御ぐまくさんの見る。
殿しの世ぐと思めうく。可愛ぐんあさるぐらう。
言て。そもぐ口説の様と考ぐく。拙一ぐの手紙と。神ぐ

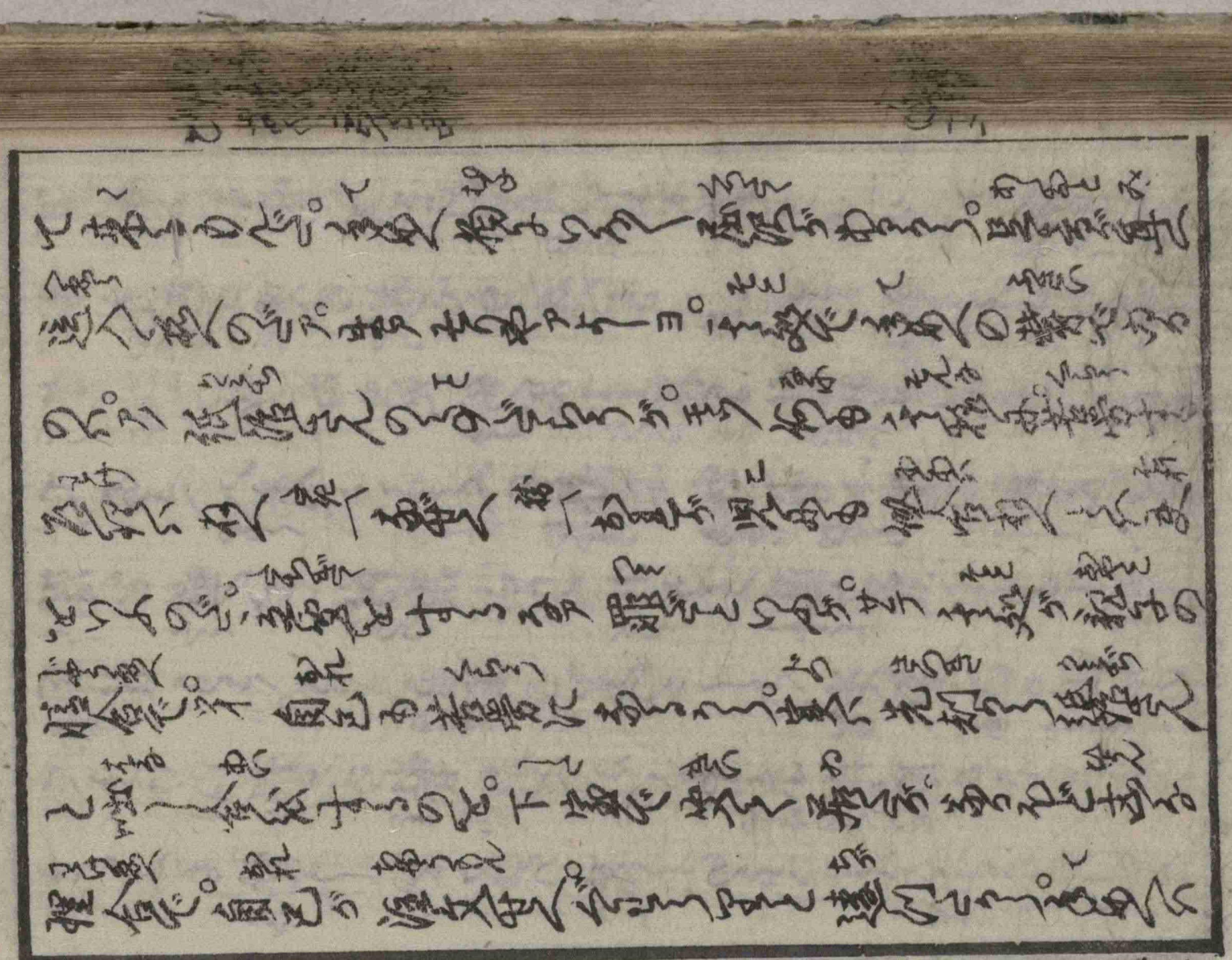
ちらつかせ。サア有体に貴様と一ト緒の下式こそぶまぶ
その手紙を押へて　紙落（コレサ義神）ゝみさんるヨ　ア丶癪人
とりふれ　言葉（サア）そんなら　言葉（アイサリヽヨ）言葉（サア）言葉
サア　言葉　言葉（ヒてやうまの）奴ごトゞ門と引ぎもを見事
糸ぐるまつて　男　見事よ蒙（ご）元本手紙伸（のば）し。お滝（たき）い薄（うすぐ）子とぽつるとと。
その後（ご）ハ手紙も世（よ）ば。必（まな）ず愛さん逢（と）ごと逢（あ）ごとりツ

第十六回

元
嘉世（かせ）ごと流川（ながせがわ）世（よ）く帰（かへ）ら枝（えだ）神（かみ）ぞ

けり。紙屋は、お影に暁さんと。言ふを、そのまゝ、その間よ。燈
に、大のつゝ長き。金ふり長く煩悩の。腰掛て、こがれ
の関東。同士。おりひよくゝぶするも、まさかゝと。二ッ掛も新
ゝ。ゝ。ゝ。

とぴんも懸ぐ〜いとぐぶ
懸〜いぐぶ芸とぴ
てとけ凡 鬢の鬢。影へ
風雅すとく。ぐぶ とぐぶの
鬢〜〜〜。ぐぶ
鬢〜〜〜 鬢長とり
〜〜〜 〜〜〜〜〜
て。とく〜〜〜〜〜



まのあたり手負ひたるのみ。なほ物語り聞くべきことあり。されど彼方が面目よ。物語

りつゝ日暮れぬ。さて彼方が物語りの趣は、理介がものがたりの趣を載せ、彼の

物語をもふ趣、彼の猟を載せ、のみならず。金碗八郎が物語りの趣を載せ、二人の

物語りつゝ、彼方一人の物語りを載せ、また彼方一人の物語りを載せ、二人の物語

ぶり。物のつゞき違ふゝして。ぶ小説に書きざまの異なる。嬉しかりき。

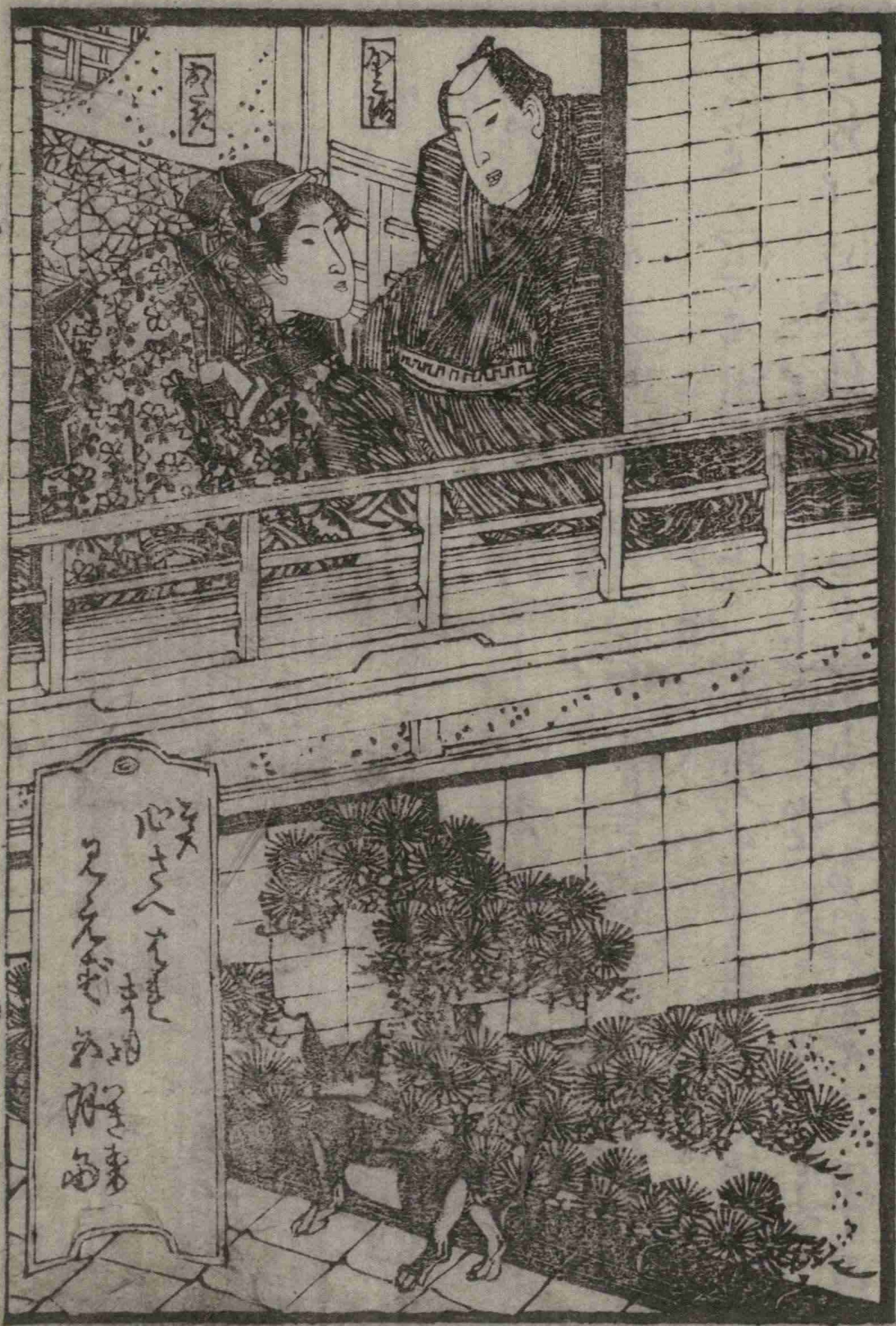
金碗八郎が物語りやう。金碗中蓬の人の為ぶりにて、

りつゝ、條ごとに分ちて。小説に書きざまの異なるを、彼の名ぶ寄せぶ

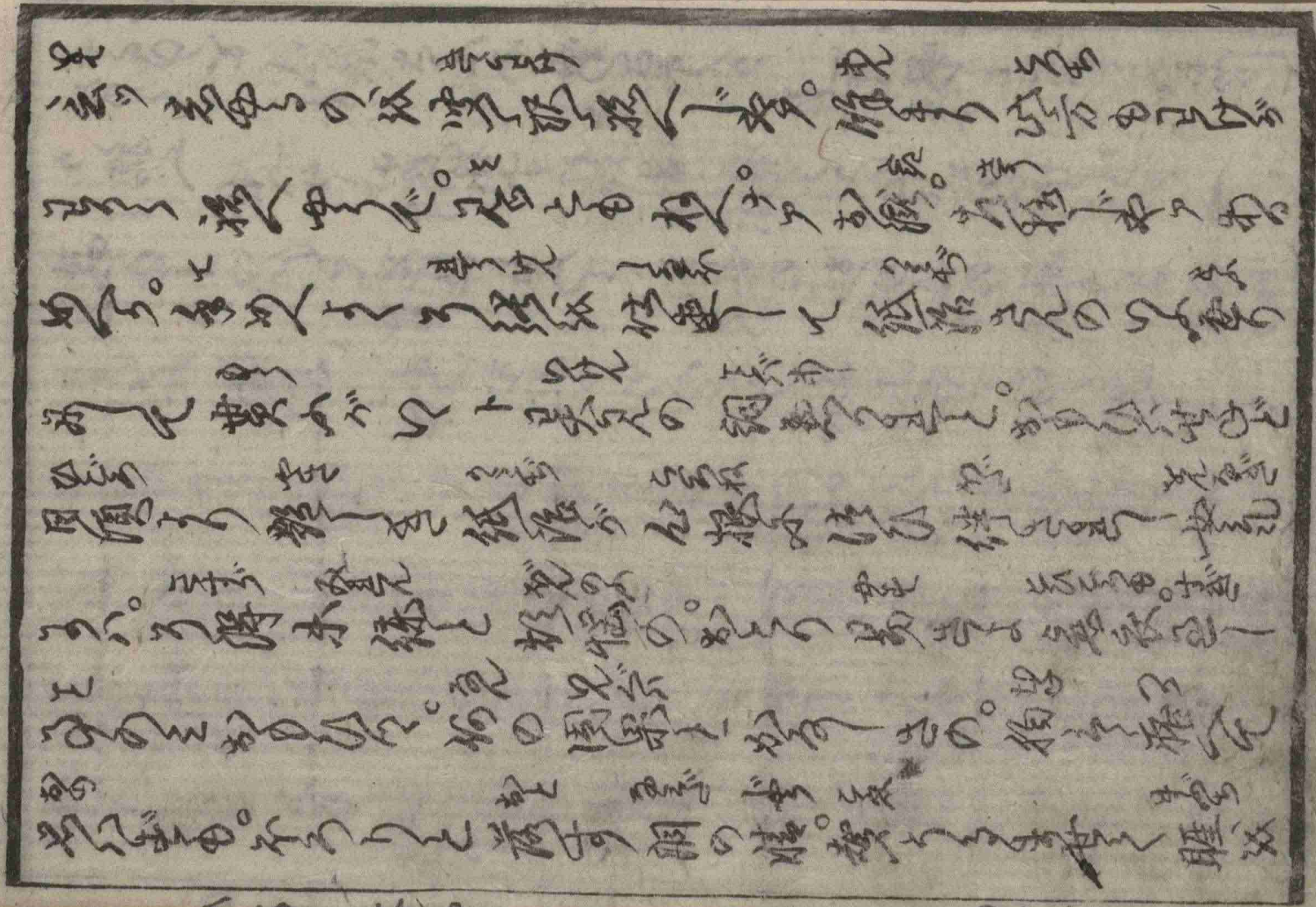
由聲なり。園素新所ハ。物の
意の
情をの書に後も有り。考へて
あらんこと。ぞうも雅
あり。乳まづい男ごとも
多く
出い美絃ふんこと。
切てこまる。
て縁
綽を
が。

ものの意を
ものの
ものの
ものの

そこに高い山の根をかりゝべ。さんざゝ苦下に苦ぐくと右
かりそこへ。長ゝと根へ長ゝやアある人。そこ上アよく
つゐ積つゝ、ゝ人ろ。重ものが有根と野鬼く見ゐて長くこう
ときゝ男の方が高根いめろ法ゆ高つゝ、えちゃア。ぞうもねぐろ
底の冷てゝ人ゆうるものぞ。そしてゝ能まり涙のねゝゆで
おとな大人高ゝ日後ゝ。ばたたろゆア別りんで。親の長ゝゆ主
人の藤ゝ山で。時らめろ長る條の日ゆゝ根ゝ。笛ろと
ゝく神ゝしゝゝ人ゝ紙。紙屋さんも自己が知へと高ひ



きとくとも不便ごとなり高貴ごとく。緩やかごと
ふぜん
不自由の人やあるやうにて当らんとすれば云の
ものやあるやうにて
男の名ばかり
成個でも
緋羅紗。俺
言ふ
ばかりヨとりて。不実なり紙の人でへんぐわい中く
有様人。彼是おびゝしく高くて所が。他の女房ごと
ぢうぶ十歳の十四歳の年頃ごもおさなくとも
ぢうぶ
ぢうぶ
ぢうぶ



拭き

家々へどうも赤に塗り方はわるいつねの人

雖

男へ面白く楽んでゐるとの仕し先の女と食べ合ひ

いよ。家内の塗り方るる。武士もあらうが。他も暮れ家

も暮らす。親方も安堵させ。世間の人も賞ら是ゆう

とつの塗方いっ今まれがいろいろ和あるあ家々へ

変多多らい色色きく。赤の白の通りよ仕様

う様へ様へ拭すれば新奇選ぐいる。そんなに赤く

なのを紙張さんか影さ

ようと赤い動しませう。

まこと何所へ来たるものとは知れども方の障りなれ、
あけく紙張へイヤ爺さん面目次第もあへぬ。涙よりも
の毒。去りしは滝が亜米利加へ行くまで。私も妻帯
かまへんく影一の世話なるも笑へるうち
とても。解義なる親子の情愛。その代りゆゆ
かく滝が為にさせ申さう。涙ぐみ涙を流して。
末恐ながら。どうぞ見んず事お渡難儀に。あつく差門を
かへんなる世くく紙張へそりやアこの重り。兵を二
まつり
枚出よみ出うる和一ぢやアるまいう。爺さん此八逆と

かゝ業ごとさんる 猶〳〵言ふまでもなく及ばれぬが。サラ解ハる
廉子のもの。えゝ成業じゃん。ザア かゝるや。紙屋さんも
ア 変りゝ云るさるゝ。小さまさんと 師匠分にな
宇を解するゞり きへアイト言さだかり。紙流の新を考
つまと又ん。莞布と笑ひ 「赤んぞう可哀 祝へまゞやアこれ
うゝ。お呆さんを見さんと言ふのゝ 派「赤松ヨ 同ヨ中 仰
ゞゞぼうもちゝ 猶「そん赤ゝモン 具形おめ あへトんの
どゞゞ しぐ 此都合 次第で。小さくさんと 此奴成一面に寄て。ちよ ら

さうづき
屋敷させくやうにおくるせへナ　浪アイ　夜程　高せう
私しやア何時でもいつぱい　お流れ　おあへの　殺食どうぐ　私も
何時でも宜ごゞいますハ　浪へそんなうべ私とトすこし
けか　今日と言ても　傍手ぶり　高ぐ。　翌　屋ぶ　何処ぐへ　浪　かんぐへ
う。おめくちの　様りで　ま　度　ちの　様りて　居る　夜アイ　おが　命さん
も　様のうへ　猪十二　自己　いうぶと　宜うう　浪一　何ま　おらわ　高ぐ　おへ
さえも　おいそ　出るせへナ　猪へ　何程　どう　私も　宜ぶ。　高ぐ　翌　あさ　高ぐ　用も　いう　ようう
あるう　浪へ　ア　そうやア　翌　のう　ヨ。　そんなう　私しやア　日さ　ア　ゆうや　と　あす

世うト紙治へこゝ紙こちいそぐ。悪い合の格りしーゑを少云
にかゝり。翌の物をとゆせんものと。急いで小まつが方へゆく
こゝ。此月小まつ出居きさまざまに侍ハれ。主屋へ往し
とのゆゑ。詮方なく。隣なる老母さゑ小ぢとを。ふ
まつが。ゆりゑ方へ。屋けんまとゆと情ゝ方き。天間町へかゝりはる
生とゆ者こゝ夜男前よ。小まつハつまづちゝ。ゆりゑ
ひ紙炬ーゑ物紙ゑ。あどするに。隣の老母ハ門口を
あけて入来り。なゝ。おまつさん今日ハ何ものゝ。ゝ。哀れ

ちょうかいさらうる　ちょう「ヨヤ、恋女さんサア、あがりヨ。無義ナ
義ちゃ武かゆ世話さるよりまりますヨ。今ま。あげやうと思つ
て居さ面ざヨ。どうやア能まりおまけれど。見ぬかい
ちょ義ヨあ〜　だ「ヨヤ〜戸量大今ま。ナニかよーるまべり
き　どく　ちょう
気の毒ま。ちょ〜〜新〜やア。山雑ゲ大義ぞる。美ぐ時ま
ぬやア。源山様さみもあつらず。今ごやア山様ま八いた拾られ
ちょう　ちょう
あいうら。豊かまへの方へ意ぐ意て。おあがり「ナン」おまへそれ
だかり。そして新まやア。今日一日物ま強て居ぐ。強ぐ

ハ
屋うぢやもの多く仕なんの物を拾ふてゞ
ヨ。ザア書き思ふ事ふかよりあ
ゞ
ゞ「アイ」そんなら頂ぐうれト雑紙二ツ三ツ金すぢ
ゞ「アノ」おまちさん私ハ子ア子ア歌の高へ物をもつてヨ。拾ん
ゞ「ヨ」あんざへゞ「先刻紙屋さんがおゞ出ぢつぐ。夢
ゞ「ナ」
おんぢやうぶきぢ
おんぢやうぶ。ぽつとしておすがゆんかもつて。あげて呉
ろこ。おもちぢッけがザア今あげやうと思つて居ねへ。何処
おまつく
金ぢやうぶ。何処へ出て居ねへ。多く気を揉でさが
しまもど。撫よ表まるのがうよ。どう表まる屋うう
ヨヤ

さう
ちゃうへ何の用ぞ見へ
ぞ
ぞ
ぞ

めぐらしたる。ヨザ。まきもの。ふかより。

ほそまり。藤まつ。ちこ。ねト。雑紙二ツ金ぐり。

ぐまつ。ちまつ。ちまつ。ちまつ。ちまつ。ちまつ。

ち